

# 「大川印刷」 「印刷しない印刷会社」掲げ ペーパーレス化へ積極対応 スキャンニングと社会課題解決型スタジオで

## 株式会社大川印刷

再生可能エネルギー（再エネ）100%、石油系溶剤0%のインキ使用など、環境印刷を先進的に推進してきた「大川印刷」（本社・横浜市戸塚区）は、脱炭素化のさらなる高みへ歩みを止めることはない。そこにペーパーレス化という逆風が吹き荒れる。打ち出したキャッチコピーは「印刷しない印刷会社」だった。今年144年を迎えた老舗印刷会社が、決断した背景や対応策、本業を通しての社会課題解決を目指す思いなどについて、大川哲郎社長に話を伺った。

### 風と太陽®で刷る印刷を実現

同社は、欧米との貿易が活発になるころの1881（明治14）年に創業した。大川社長は2005年に六代目社長に就任し、いち早く、環境問題と向き合ってきた。

当初、取引先を含めた社会の関心は高くはなかったが、動きが加速したのはSDGs（持続可能な開発目標）が話題になったころからだ。

同社では、次年度にやるべきことを、パートを含めた従業員みんなで、ボトムアップ型のワークショップで見だし、経営計画を立て、チームをつくっていく。SDGsを横串に据えると、活発なアイデアが出された。

そのなかで、強く光を放ったのが「再エネ100」だった。中小企業にとって、厚い壁とも見える取り組みも少なくなかったが、次々に具体化していった。「難しいからといって、立ち止まると、考えなくなる。SDGsウォッシュ（なりすまし）と言われないう、できる限り行動していこう」とみんなで誓い合った。

世界の情勢から「環境にやさしい」から「環境に正しい」へ切り替えていかなくてはならないのは火を見るよりも明らか。科学的根拠に基づく歩みを止めてはならなかった。

それらの全体像が「風と太陽®で刷る印刷」だ。



ミーティングの様子。社員からのボトムアップで経営計画を決めていく

## 「環境に正しい」へ歩み止めず

2016年にカーボン・オフセットにより、CO<sub>2</sub>ゼロ印刷を実現。2019年には自社の電力を100%再エネ化した。太陽光パネルを使った自家発電で約20%、残り約80%を青森県横浜町の風力発電を購入することで達成した。石油系溶剤0%の植物性インキを使用、FSC®森林認証紙の使用も93%まで高まっている。

またSBT認定（パリ協定が求める温室効果ガス排出削減目標設定）を2021年に取得。CDP（環境情報開示システム運営の非営利団体）の質問状には昨年9月に回答済みだ。

温室効果ガス排出量の算定にスコープという基準がある。スコープ1は事業者自身が発生させた温室効果ガス、2は他社から供給された電気や熱などの使用に伴う間接排出、3は他社が事業者の活動に関連して発生させた温室効果ガスだ。

スコープ1はカーボンオフセット、2は再エネ100%化で達成できたが、3でゼロを達成するのは不可能とも言える。だが、この達成にも努力を惜しまない。

上流と下流に分けると、上流で再エネ100%の企業を選んだ方が効果的と判断し、インキや紙などの取引先を呼んで、再エネ100%の勉強会を開いている。そのかいもあって、中小の材料メーカーでも、自社負担してカーボンオフセットする企業も出てきた。



CHES（本社工場）の屋根に設置された太陽光パネル。この電力に加え、青森県横浜町の風力発電を購入することで再エネ100%を実現している

## 卵の殻で作った紙でCO<sub>2</sub>削減効果

世の中は、サーキュラーエコノミー（循環型経済）が本格的に求められ、自然資源に対してプラスになる働き掛けをしていこうという「ネイチャーポジティブ」の時代になってきた。



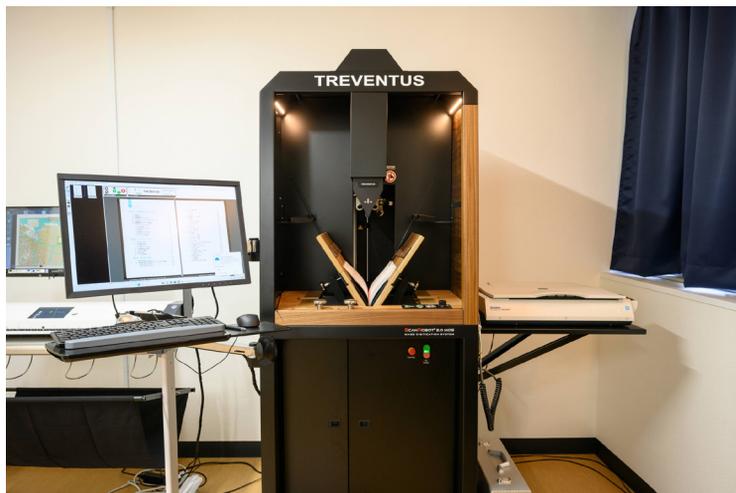
そこで着目したのが卵の殻だ。国内では年間約25万トンを処分費用をかけて廃棄されている。卵の殻を微粉碎したもの（10%）とFSC®の認証を受けたパルプ（90%）で紙を作製。ごみの減量につながり、焼却によるCO<sub>2</sub>排出量も削減できる。この紙を開発した会社では、名刺1箱（100枚）を作るごとに、1本のマングローブがフィリピンのセブ島周辺の海域に植林される取り組みをしている。さまざまなノベルティや製品への展開も可能ということで、大川印刷でも力を入れている。

廃棄される卵殻を使用した用紙の名刺1箱につき  
1本のマングローブをフィリピンに植樹

## スキャングロボットなど導入

「ここまでは追い風だったが、逆風が来た。時代が脱プラからペーパーレスへも広がってきた」。悔しさにもじませる大川社長は「悪いこととは言えないが、『ペーパーレス＝わが社のSDGs』と言って、他の取り組みを深めようとしない企業があるのも事実」とも話す。そんななか2023年12月に出したキャッチコピーが「印刷しない印刷会社」だ。

この言葉に込めた思いや背景は何なのか。一つ目は、無駄な印刷は作らない、作らせないということ。二つ目は、デジタルと紙の利活用の最適化の提案ができる会社であること。三つ目は、ペーパーレス・デジタル化を再エネ100でサポートすることだ。



日本で3台目の導入となったスキャングロボット。A4までの書籍を高速スキャンが可能。これを含む4台のスキャナーで最大A0版までの原稿サイズや形態に対応できる

そこで2024年1月に導入したのが、国内に3台しかないスキャングロボットをはじめ計4台のスキャナーだ。書籍の場合、1時間に最速2500ページのスキャングが可能だ。

企業・団体や行政に保管されている文書資産について、再エネ100でデジタル化。

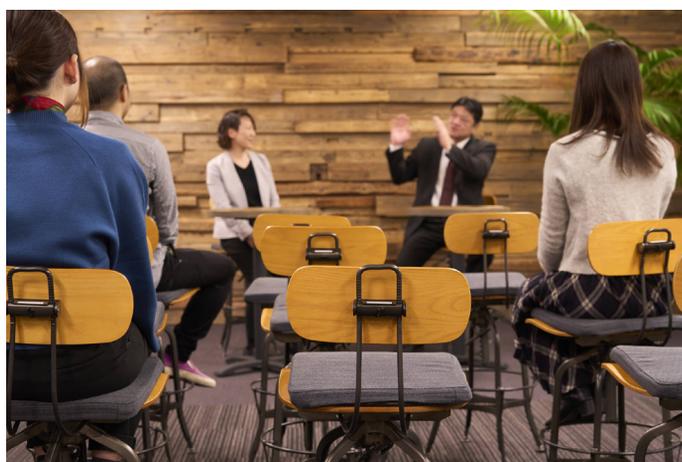
OCRで全文検索可能にし、チャットGPTに活用できるようにする。データ化で不要になった書類は溶解処理で再生化し、新たな製品へアップサイクルさせることもできる。

「PDF化で電子化が終わっていると勘違いしている人が多いが、全文テキスト化するOCRまで作業しなければ、チャットGPTなどの活用はできない」と大川社長は話す。

## 社会課題解決の受発信基地に

「印刷しない印刷会社」のもう一つのカオと期待されるのが、社会課題解決型スタジオ「with GREEN PRINTING」だ。2022年3月、横浜駅近くの横浜営業所を改装し、動画の収録や配信が、再エネ100で運営でき、イベントスペースとしても使えるスタジオとしてオープンした。

社会課題に関心のある人や企業をつなぎ、交流や議論をすることで、ビジネスや協力関係が生まれる場にするのが目的だった。しかし、現在は、月に1回、社会課題解決に資する映画の上映会を開いているほかは、まだまだ理想の使われ方にはほど遠い。



with GREEN PRINTINGではウェビナーやトークショーなどの動画配信や収録が可能。30席の客席が用意でき、リアルイベントと配信のハイブリッド開催も可能

やや苦戦しているともいえるスキャング事業とスタジオだが、大川社長は「いま事業の見直しを掛けているところだ。スキャング事業は楽観視しているわけではないが、中小企業などデジタル化が遅れている所のニーズはあるはず。DXのお手伝いという観点からアプローチしていきたい。スタジオについては、もっと気軽にイベントなどにも利用してもらい、再エネ100でイベントができることが当たり前になれば良いと思っている」と話していた。（春名 義弘）

この記事は、横浜グリーン購入ネットワークの会員対象SDGs活動支援プロジェクトによって作成されました。

内容についてのお問合せ:

横浜グリーン購入ネットワーク事務局

E-mail:mail:yokohamagpn@gmail.com

http://www.y-gpn.org/